
遊戯王 ～academy of days～

舞楽魔磁上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～ academy of days ～

【Nコード】

N6570H

【作者名】

舞楽魔磁上

【あらすじ】

GX本編の終了後から数年後。デュエルアカデミアに1人の少年が入学するのを境に新たな物語が始まる――。オリカを大量に出したり、更新不定期だったり、厨二臭かったり、ルール上間違っていたりと、不安要素満載な所もありますがご了承下さい。

第1話―入学試験（前書き）

フェイズの表示DP↓ドロフェイズ SP↓スタンバイフェイズ
MP1↓メインフェイズ1 BP↓バトルフェイズ MP2↓メ
インフェイズ2 EP↓エンドフェイズです。基本アニメ寄りのル
ール設定でライフは4000制です。つたない文章ですがどうか最
後まで見ていって下さい。

第1話―入学試験

――デュエルモンスターズ。

それはある時は巨額の富と名誉を手に入れる力となり、ある時は友情の糧となり、ある時は世界を壊す兵器となる…。

これは特殊な過去を持った少年、工藤 兵吾が辿る軌跡を綴った物語である――

「ペンギンナイトメア召喚！BPに移行してそのまま直接攻撃だ！」
少年がそう叫ぶと同時に前にいたペンギンのようなモンスターが紫色の服を着た相手の男に突っ込んだ。男はそれを直に受ける。

「ぐっ…フツ、いいだろう。合格だ」

「ほ、本当ですか！？やったあっ…！」

「だが、入学が確定したとしても精進は怠るなよ。日々の努力を忘れないように」

「はい！お相手ありがとうございました…！」

少年は深々とお礼を言った後、デュエルディスクを腕から外し、スキップしながら会場を後にした。

「…ふう、2人目でこれか…。今年は実力者が多いな…」

男は少年の背が会場から見えなくなった後、大きな溜め息をして整えた白髪のを掻きながら呟く。

デュエルアカデミア。

一流のプロデュエリストやデュエルモンスターズに関連する仕事に就ける為の教育を受ける事が出来る学校だ。

そして今日は、デュエルアカデミア高等部の入学試験…実技の部の開催日。

男はその試験官としてこの会場に…海馬コーポレーション本社にある公開デュエル場の一画に居るのだ。

（でも休みの日まで教師の職務をしなきゃいかんとはな…）

今日はこの試験がある為、授業は無し。生徒も教師も休みである。だからこそ男も今日はゆっくりしようと思った。が、その前日に試験官となる教師が体調不良を訴え、代打として男が選ばれたのだ。

しかもその旨を男に言ったのはデュエル監督の最高責任者であり、教頭でもあるクロノス・デ・メディチ。

単なる一教師である自分に拒否権など無い。だが教師である以上こういう事は避けられない。

（まあ…言われたからにはやるしかないか…）

男はそんな考えを振り払い、気合いを入れ直す。

「うし！次は受験番号3番だな。入って来い！」

「失礼します」

男はデュエル場の出入り口にそう叫ぶと、受験番号が振つてあるバツチを付けた少年が入って来た。

漆黒の瞳と髪だ。まず髪は少し横に跳ねているのがあるものの、あの程度は整えられている短髪。瞳は闇のように黒く、厳しさと力強さ、そして何処か少し悲しげな雰囲気を含んでいる。

顔立ちも凛々しく、恐らくイケメン…それも最上位に付くに相応しい雰囲気を持つ。

男はそんな少年の容姿を観察しつつ、お決まりの自己紹介をする。

「私は試験官の谷本 司だ。デュエルアカデミアでは教師をやっている。で、君の名は…」

「工藤 兵吾です。宜しくお願いします」

男の…司の問いに兵吾は表情一つ変えずに冷静に答え、そして司は兵吾の右腕に装着されているあまり見る事の無い右手装着型のデュエルディスクを見る。

「…珍しいな、だが何故そんなものを？」

「…利き腕が左で、個人的に使いやすいので。それよりも…」

言いながら、兵吾はデュエルディスクを展開する。

「…そうだったな。始めよう」

兵吾の意志に呼応され、司もデュエルディスクを展開する。

「（…あの口調、かなりやるようだな。フツ、楽しみだ…）行くぞ！工藤君！！」

「はい、宜しくお願いします」

そう兵吾が言くと、場に緊張と沈黙が走る。

「「デュエル！！」」

そしてデュエル場に一言、言葉が響く。

お互いにデッキからカードを5枚引き、それをデュエルディスクを装着している手に納める。

「先行は譲るよ、工藤君」

司の一言でまずは兵吾から動く。

「俺のターン。ドロー」

そう言った後、兵吾は少ない動きでカードを引き、素早くそれを手札に納める。

バトルソルジャー
「俺は戦武兵ソードウォリアーを攻撃表示で召喚します」

「戦武兵 ソードウォリアー」

効果

4 / 光 / 戦士

ATK / 1600

DEF / 1400

このカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●自分のデッキから「戦武兵 ソードウォリアー」以外の「戦武兵」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える。

●手札から「戦武兵 ソードウォリアー」以外の「戦武兵」と名の

ついたレベル4以下のモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

兵吾がモンスターを設置する所にカードを置くと同時に兵吾の前に日本刀を右手に持ち、身体に黒いコートのようなものを身に纏った青年が現れる。

バトルソルジャー

「戦武兵か…。となると君が例の？」

「ええ、先生の考えている通りです」

兵吾がそう言っていると、司は出て来たソードウォリアーを興味深そうに見る。

…司がそうなるのも無理は無い。

いや、おそらくデュエルモンスターズに関係する者は皆そうなるだろう。

何故ならこの戦武兵と名の付くシリーズのカードは…遊城十代のみが持つE・HERO ネオスや、ヨハン・アンデルセンが使う宝玉獣シリーズ、そして武藤遊戯のブラック・マジシャン等のような世界に数枚程しかない最高峰のレアカードだからである。

…本来、この戦武兵は普通のパック等で当たるカードとして製造される予定であった。

しかし、量産を前にトラブルが発生し開発データが抹消。最終的に残されたのは初期に開発されたプロトタイプのカードと試作段階で製造された量産型数枚だけであった。

その後、計画が再起不能となった戦武兵シリーズのカードを処理するとインダストリアル・イリュージョン社は発表。

デュエリスト達に見えない闇へと戦武兵の計画を葬った…。

と言うのは表沙汰の話。実はこの戦武兵シリーズのカードはインダストリアル・イリュージョン社の社長ペガサス・J・クロフォード氏の好意によって1人の子供に贈られたらしいのだ。

…らしい、と言うのはこの話が噂であった為。司も真実を知らない

1人だった。

だが、その噂は本当だった。少なくとも今日の前にいる兵吾がそれを証明している。

「ソードウォリアーの効果発動。2つある効果のうち、デッキからこのカード以外の戦武兵と名のついたモンスター1体を手札に加える効果を選択。《戦武兵 ランスロード》を選択し手札に加えます」
兵吾はデッキを一旦ディスクから外し、そこからカードを1枚抜いて残りをまたディスクに差す。「カードを2枚セットして、ターンを終了します」

兵吾が言いながら魔法、罫をセットする差し込み口にカードを入れる。そしてそれと同時に兵吾の前にカードの裏側を表示した巨大なカードが2枚現れる。

1ターン目終了現在

兵吾 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター… 1

「戦武兵 ソードウォリアー」

魔法罫… 2

セット2枚

司 side

LP / 4000

手札 / 5

モンスター、セット無し

「さて、私のターンだな。ドロー！」

ソードウォリアーを一通り見終えた司は兵吾の方へ姿勢を変えつつデッキからカードを1枚勢よく引き、それを確認する。

「ヘカテリスの効果発動！手札から墓地へ捨てる事により、デッキから《神の居城―ヴァルハラ》を手札に加え、効果使用後ヴァルハラをそのまま発動だ！」

「ヘカテリス」

効果

4 / 光 / 天使

ATK / 1500

DEF / 1100

このカードを手札から墓地に捨てる。デッキから「神の居城―ヴァルハラ」1枚を手札に加える。

「神の居城―ヴァルハラ」

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚できる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

司がヴァルハラのカードをデュエルディスクに差し込むと同時に2人の周りが単なるデュエル場から宮殿のような風景に変わる。

司のデッキは天使族を中心としたデッキだ。

ヴァルハラはそんな天使族の召喚の要となるカード。これを使えば天使族ならリリースが必要なモンスターもリリース無しで出せる。セットしてあるカードが気になるがこれは試験である。

兵吾の実力を知らねばならない以上、今は突っ込むべきだろう。

「ヴァルハラの効果発動！手札から《光神機―轟龍》を攻撃表示で特殊召喚だ！」

「光神機―轟龍」

効果

8 / 光 / 天使

ATK / 2900

DEF / 1800

このカードはモンスター1体をリリースして召喚する事ができる。
この方法で召喚したこのカードは、EP時に墓地へ送られる。この
カードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が
超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

カード設置後、司の前に機械と龍が混じったような印象を受ける金色の装飾を施されたモンスター、光神機―轟龍が現れる。

しかし現れた刹那、轟龍は突然真下に出現した大穴に吸い込まれて消えてしまった。

「ッ！？…そうか、1枚は奈落だったって訳か…」

司は少し驚きつつも、兵吾の前に伏せられたカード2枚の内、相手に向けられるように表示された1枚のカード…《奈落の落とし穴》を確認する。

「奈落の落とし穴」通常罠

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「轟龍はやられてしまったがまだ私には通常召喚が残っている！天空の聖域を発動し、コーリング・ノヴァを攻撃表示で召喚…」

「畏発動、サンダー・ブレイク。手札1枚を捨てコーリング・ノヴァを破壊します」

「天空の聖域」

フィールド魔法

天使族モンスターの戦闘によって発生する天使族モンスターのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

「コーリング・ノヴァ」

効果

4 / 光 / 天使

ATK / 1400

DEF / 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下で光属性の天使族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。また、フィールド上に「天空の聖域」が存在する場合、代わりに「天空騎士パーシアス」1体を特殊召喚する事ができる。

「サンダー・ブレイク」

通常罫

手札からカードを1枚捨てる。フィールド上のカード1枚を破壊する。

司が今召喚したコーリング・ノヴァがサンダー・ブレイクの絵柄から飛び出た稲妻によって貫かれ、ガラスのように碎ける。

「やるじゃないか工藤君！私はカードを1枚セットして、ターンエンドだ！」

2ターン目終了現在

兵吾side

LP / 4000

手札 / 3

モンスター…1

「戦武兵 ソードウォリアー」

魔法罫…0

司side

LP / 4000

手札 / 1

モンスター…0

魔法罫…1

「神の居城―ヴァルハラ」

「天空の聖域」

セット1枚

「俺のターン。ドロ―」

兵吾は先程と同様に少ない動作でデッキからカードを1枚引き、確認後そのうちの1枚を左手に持って司に見せるように掲げる。

「手札から大嵐を発動。フィールド上全ての魔法、罫を破壊します。…と言っても、効果を受けるのは先生だけですけどね」

兵吾と司を包むかのように巨大な竜巻が発生し、2人を囲む。
その最中、司の天空の聖域、ヴァルハラ、セットしてあるカード…
《激流葬》が吹き飛ぶ。

「大嵐」

通常魔法

フィールド上の魔法、罨カードを全て破壊する。

竜巻が止んだ後、周りの宮殿のような風景は消え、場には兵吾のソードウォリアーのみが残っていた。

「一気に決めさせて貰います。手札から死者蘇生を発動。俺の墓地にある《戦武兵 ランスロード》を攻撃表示で特殊召喚します」

死者蘇生によって兵吾の前に現れたのは銀色の鎧と白いマントを身に纏った男の騎士。

右手には先端にやや大きめ刃が付いている槍を、左手には人一人を覆う程の大きさで、中央に明るい緑色の宝石が埋め込まれている盾を持っている。

「死者蘇生」

通常魔法

自分または相手の墓地からモンスターを1体選択する。選択したモンスターを自分のフィールド上に特殊召喚する。

「戦武兵 ランスロード」

効果

8 / 地 / 戦士

ATK / 2500

DEF / 2000

このカードは相手の魔法、罠の効果を受けない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「…こいつは、詰みだな…」

司が諦めたかのように小さく呟く。

ソードウォリアーの攻撃力は1600。今出たランスロードの攻撃力は2500。

現在、場がから空きである司にはどう足掻いてもこの2体の攻撃を凌ぐ手段は無い。

「行きます。ランスロードで直接攻撃。スラッシュスピア」

兵吾の掛け声と同時にランスロードが司に突貫。一気に右手の槍で司を3回斬りつける。司

LP 4000 ↓ 1500

「ぐっ…」

ソリッドビジョンである為、痛覚はほぼ無いものの全く痛くはない。
「終わりです。ソードウォリアーで直接攻撃。光刃一閃」

そんな司に今度はソードウォリアーが一瞬消えたと同時に司の目前に現れて斬る。

その数秒後、司のデュエルディスクが自分のライフが0になったことを知らせるアラーム音を鳴らした。

司

LP 1500 ↓ 0

「…ウウ、完敗だよ工藤君。合格だ」

ソリッドビジョンが消えた後、司はディスクディスクを戻しつつ、兵吾にそう伝える。

「…ありがとうございます」

兵吾は表情一つ変えず、司に言いながら会釈する。

「…全く喜ばないんだな」

「入学が確定しただけです。特に喜ぶ事ではありませんよ」

「そうか…。ところであのモンスター、先のサンダー・ブレイクで捨てたやつか？」

「ええ、ちょうど手札に死者蘇生があつたので」「なるほど…。急に質問してすまなかった。とりあえず試験は終了だ。向こうじゃ宜しうな、工藤君」

「はい。それでは失礼します」

兵吾はそう言うのと静かに踵を返しデュエル場を後にする。

…かなりのプレイングと引きだ。

出口へと向かう兵吾の背を見て司はそう考える。

実際、使用するのが戦武兵と言うのもあつたがここまで相手のペースを崩せるプレイングと、そのプレイングを誘発するカードの引きの良さ。

…彼とやる前にも先程2人相手をしたが、この2つをここまで両立できたのは彼だけだ。

そして、喜怒哀楽を全く見せぬ表情…。

今まで色々な生徒を見てきた司だが、情緒が出やすい10代の子があそこまで冷静沈着なのは少しおかしい。

実際、兵吾はここに入ってから人形のように全く表情を変えていない。背を向いているので分からないがおそらく今もそうだろう。

…何かが違う。

それが何かは分からないが司は彼に2つの事を確信していた。1つ

は今の事。

そしてもう一つは…彼がデュエルアカデミア史上最強の生徒になる逸材である事だ。

「遊城十代以来だな…こんな天才が現れるのは…。いや、彼以上かもしれない…」

彼がこれからのデュエルアカデミアをどう変わるのか…、そしてデュエルアカデミアが彼に何をもたらすのか…。

司はそんな期待を内に秘めつつ、この後の試験に臨むのであった…。

第1話―入学試験（後書き）

いかがでしたでしょうか？良ければ感想、意見等宜しくお願いします。

第2話―兵士VS獣（前書き）

1話の前書きで説明不足な所がありましたので補足させていただきます。
まずカードですが、後ろに が付いている（1話のランスロードも含めて）のはオリカです。次にアニメ寄りのルールについてですがこちらは表側守備表示での通常召喚の可能と一部の制限カード等の使用以外はOCGとほぼ同じ（なはず）です。

第2話―兵士VS獣

太平洋に浮かぶ広大な孤島。

そこには森、湖、浜辺、火山が存在し、まるで自然そのものが生きているかのような空間が広がっている。

そんな島の中央にデュエルアカデミアは建っている。青、黄、赤の3色のとそれより一周り大きいドームが印象的なこの建物は基本は学校としての設備だが、保健室には怪我人が出た時用の為に並の病院以上の設備が整っていたり、購買部ではカードは勿論、服のような日用品等、ありとあらゆる物が揃っていたりとある意味学校としての粹を超越している。

そして周りに隣接する島の無いここではこの設備がかなり重宝するのである。

そんなデュエルアカデミアだが今、校長室で1人の教師が校長に抗議をしていた。

「何故なノーネ鮫島校長！何故シニョール工藤をオシリスレッドに入れたノーネ！彼は筆記も実技も今回の入学試験ではトップクラスだったノーネ！」

口調で分かると思うが、抗議をしているのは現在デュエルアカデミアの教頭で、デュエル監督の最高責任管でもあるクロノス・デ・メイチである。

ポニーテールにした金髪と首、肩に飾りが付いたオベリスクブルーの制服とよく似た服を着ていて、独特な口調で話すデュエルアカデミアの有名人物である。

以前はエリートにしか興味を示さない一教師だったが、遊城 十代や丸藤 翔のようなレッド寮生徒達等を通じてその考えを改め、今となってはレッド、イエロー、ブルー関係無く接する立派な教師となっていた。

とは言ってもまだエリートに対する執着心は健在で、自分の納得がいかない結果にはこうして抗議をしているのである。

使用しているデッキも、相変わらずの「古代の機械」シリーズ。

こちらでも口調同様、彼の変わらないものの一つであり、ユニークさの一つでもあった。

「彼こそデュエルアカデミアの新たな時代を作るエリートの中のエリートなノーネ！これこそ鯨島校長が新たに決めた寮編成の基準に従うべきなノーネ！！」

クロノスはここまで一気に言う腕を組んで機関車から出る煙が鼻から出るかの勢いで鼻息をする。

この数年でデュエルアカデミアには寮に関しての大きな変更が幾つもあった。

その中で最も大きく変わったのは「ブルー寮の編入条件が無くなった事」と「女子生徒も男子生徒と同様にレッド、イエロー、ブルーの3寮に分けるようになった事」だ。

以前までブルー男子寮は中等部で優秀な成績を取った者のみが入学時から入れた。

しかしそれではレッド、イエローしか入れない外来での入学者がその真価を発揮する事ができない。

一方、女子寮はアカデミアの女子生徒全員が入る為、そのような制限は無い。

しかしこれもこれで問題がある。

男子には寮の割り当てがあるが女子には無い。

ここで男女間の格差が生まれる。

ここで一部の生徒による「エリート主義」がその格差を更に広げ、最悪トラブルへと繋がってしまう。

このように、生徒間での格差や問題を解消する為に変更が施されたのだ。

つまりクロノスが言いたいの「何故兵吾をブルー寮に入れなかったのか」と言う事だ。

「同じ外来の受験生で、彼と同じクラスの成績であるシニョール緋伊呂はオベリスクブルーに入ったノーニ、何でシニョール工藤はオシリスレッドなノーネ！納得いかないノーネ！！」

そんなクロノスの抗議をただ目を閉じて静かに聞いていたスキンヘッドの男… 鮫島は答えた。

「…確かに工藤君はオベリスクブルーに入れる程の能力を持っています。実際、我々教師の中でも特に実力のある谷本先生に完勝するくらいなのですから」

「それなラーバ…」

「クロノス先生。これは決定事項です。何を言っても無駄ですよ」

「うう… ガツクリンチョ…」

そう言った後、クロノスは落胆した様子で校長室を出て行った。

鮫島はそれを確認すると立ち上がり、窓から外の景色を見る。

「…遅かれ早かれ、彼の力はいずれバレる… そうなった時の為に、彼を支えてくれる人はなるべく多い方が良い…」

鮫島は静かに呟く。

…最初に彼の力を知った時、鮫島は絶句した。

そして、このような力が存在して良いのか？

そう思ってしまった。

「…サイコ… デュエリスト…」

それは本来実体化しない筈のモンスターを実体化させる力を持つデュエリスト。

力の強さは個々によるが、兵吾のものは…。

ここで鮫島は思考を止めた。

…これ以上考えてしまうと彼の事を悪く見てしまう。

彼を特殊寮に入れるのを反対したのは自分だ。だからこそ彼には支えとなる者が必要となる。

オシリスレッド。

成績の良いくない生徒達が集う寮だが、生徒は皆、温和で心優しい者達ばかりだ。

少なくとも、他人に与える風当たりの強い他の2寮よりは比較的安全だろう。

「…工藤君、頑張るんだよ…」

鮫島はそんな彼を静かに激励するのであった…。

一方、そんな兵吾は1人デュエルアカデミアの廊下を歩いていた。入学式も先程終え、配属される事となったレッド寮に戻るにもまだ時間がかかりある。

そう考えた末、アカデミア内の構造に慣れる為にこうして歩いているのであった。

と、そんなブラブラしている兵吾に声をかける者達がいた。

「学校見学は済んだか？工藤 兵吾」

声のした方に兵吾が振り向くとそこには後ろに2人、人相の悪そうな生徒を従えている男子生徒がいた。

青を基調とした制服を着用している所を見るとどうやら3人共ブル―寮の生徒のようだ。

「入学試験の時、貴様と谷本のデュエルはモニターを通じて見させて貰っていた。…谷本はこの教師陣の中でも比較的強い部類に入る野郎だ」

男子生徒はそのまま話を続ける。

「なのにあのデュエルは何だ！？貴様がただ谷本のカードを破壊して攻撃して勝っただけだ！！いくら手を抜いてたとはいえ、あのよきな勝利は有り得ない！！」

「…何が言いたい？」

やや興奮状態の男子生徒に兵吾は冷静に答える。「簡単な話だ！貴様はその時、不正をしたのだろう！？貴様のような外来出身の凡人に谷本が負ける訳が無い！！」

男子生徒はそう言いながら効果音が出るかの勢いで兵吾に向けて指を差す。

…一応、入学試験は事前に試験官による受験者が不正を行っていないかの確認があるので不正などまず出来ない。

つまりこの男子生徒は不正どころよりもただ単に兵吾の事が気に入らないだけなのだろう。

「何を言い出すかと思えば…その程度の事が…」

「その程度とは何だ！？その程度とは！！」

「…こここの入学試験は事前に不正が無いかのチェックを行う。つまりあれは本物の実力だ。…ブルーなのにそれすらも分からないとは…あんたの底が知れるな…」

「ぐ…貴様あ…！！」

兵吾の発言が効いたのか、今まで喋っていた男子生徒は黙りになる、が…。

「おいお前。何竜示さんにたてついてるんだよ」

今度は後ろにいた2人が腕の骨を鳴らしつつ迫ってくる。

「お前みたいな凡人が竜示さんと話せるだけでもまだ良い方なのによあ…」

そう言いつつ、その片方が殴る構えをとる。

「身の程が分かつちやいねえみてえだなあっ！！」

そして兵吾の顔目掛けてその拳を突き出す。

…が、手応えを感じる事は無かった。何故なら…。

「身の程が分かっていないのは…あんた達の方だと思っがな…」

「何…がつ！！」

その刹那、兵吾を殴ろうとした男子生徒が真横に吹き飛ぶ。

「うっ…裏…拳…だと…」

吹き飛ばされた男子生徒はそう呟いたのを最後に気絶した。

「話にならんな…」

兵吾は気絶した男子生徒にそう言い放つと、残った方の男子生徒を見る。

当の男子生徒はそんな兵吾に軽く恐怖を覚えつつも…。

「れ…レッド風情が調子に乗んじゃねえぞ!!」

自らの勇気を振り絞って兵吾に突貫する。

だがその刹那…。

「スーパー岡沢ダイナミックエキセントリックマーベラス&ビューティフルアサルトハイパーマグナムアタック!!」

「ぐあはっ!!」

突然横から技のような叫び声を上げた何かが男子生徒を吹き飛ばした。

「…た、単なるドロップキック…じゃねえ…か…」

先程と同様、この男子生徒も何かぼやきつつ気絶した。

「おうおう見事にノックアウトしてやがるなコイツ! 流石は俺が編み出した必殺奥義だ!!」

男子生徒を気絶させたレッド寮らしき男子生徒は、数回男子生徒を蹴りつつ、やたらでかい声で独り言を言う。

「岡沢^{おかざわ}涼^{りょう}…。貴様は何回我々の行為を妨害すれば気が済む!」

ここで今まで黙っていた竜示と言う名の男子生徒が再び口を開く。

「妨害も何もてめーらが俺の人生の道を阻むからこうなるんだろ?」

「何が人生の道だ!」 「どちらにしろ今回もテメー等の負けだ! 転がってるサンドバッグごと失せな!!」

「くそっ…覚えている!!」

竜示はそう言って気絶している男子生徒2人を引きずりながら逃げるように去っていった。

「はいはい悪役の捨て台詞つと。さて…」

涼は言いつつ、その状況を傍観していた兵吾に顔を振り向く。

「一部始終は見させて貰ったぜ。あの護衛の片方をやっちゃまったあ、

やるじゃねえか！」

涼は少しにやけた顔で言う。

やや黄色に近い色をした瞳だ。

髪は赤に近い茶色で所々が跳ねている無造作な髪型をしている。

そして一番特徴なのはレッド寮生の証である赤いジャケットを腰辺りに帯のようにして巻き、上には灰色で無地のＴシャツしか着ていない事だ。

…格好のせいかもしれないが不真面目な生徒の印象を受ける。

実際、風紀委員とかにも怒られていそうだ。

まあ兵吾も兵吾でジャケットのファスナーを閉めないでいるので人の事は言えないのだが。

「あのやたらテメーに突っかかってきたのは魔瑠井 竜示^{まろい りゅうじ}。大した実力を持ってないのにブルー寮で「エリート主義」を掲げ威張り腐ってる某マル〇〇イと同じ…いや、それ以下のダニ野郎だよ」

「……………」

「んで、その〇〇フォイ野郎の…って何処行くんだオイ！」

涼は一人何処かへ行くこうとする兵吾を引き止めようと彼の前に立ちはだかって彼を追う。

「どうせ暇なんだろう？ここは助けた事に対する何かの縁って事で購買部でドローパンを…」

「…助けて欲しいと言った覚えは無い…」

「…そりゃそうだけどよ、やっぱ人が困ってる所をほっとく訳にもいかねえだろう？」

「……………」

完全に涼を無視しているようだ。兵吾はただこの場から去ろうと歩くスピードを速める。

「ああもう！だったらデュエルでどうだ！それならテメーも文句無えだろう！？」

「……………」

ここで兵吾の足が止まる。

「…あんたの実力はどれ位だ？」

兵吾は静かに涼に問う。

「！？そりやもうなかなかのモンだぜ！まあ、テメーと比べりやまだまだだがな！！」

涼は胸を反らしてそう答える。

「そうか…なら、乗ってやろう」

兵吾はそう言うと、涼に体を向ける。

「そうこなくっちゃな！場所を移す。付いて来な！！」

そうして、兵吾と涼はデュエル場へと向かっていった。

デュエルアカデミアの顔とも言うべきデュエル場。

普段は勿論、特別な時にもと何かと使用する機会の多いこの場所は中心のデュエル用の舞台を360度どこからでも観戦出来るように椅子等が囲んでいる、一種の闘技場のような設計が施されている。そんなデュエル場に兵吾と涼はお互いのデュエルディスクを装着し、対峙していた。

因みに、兵吾はアカデミア用デュエルディスクを鏡で写したかのような右手用のを、涼はそのアカデミア用のデュエルディスクを装着している。

「手加減はしなくて良いぜ工藤！」

涼はそう言うとデュエルディスクを展開する。

因みに、彼も兵吾と司のデュエルを見ていた1人で、その事はここに向かう途中で兵吾には伝えてある。

「それは、あんた次第だ…」

兵吾も静かにデュエルディスクを展開する。

「ヘッ！なら本気を出させるまでだ！デュエル！！」

「…デュエル」

「先行は俺から行く！ドロー！！」

涼はカードを引き、それを含めて手札を確認する。

「俺はモンスターを1枚、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

1ターン目終了現在

涼side

LP/4000

手札/3

モンスター…1

セット1枚

魔法罫…2

セット2枚

兵吾side

LP/4000

手札/5

モンスター、セット無し

「俺のターン。ドロー。」

…ソードウォリアーを攻撃表示で召喚し効果発動。2つある効果からデッキサーチの効果を選択。俺は「戦武兵 サイスヴァルキリー」を選択し、手札に加える」

司の時と同様にデッキからカードを1枚引き抜き、それを涼に見せてから手札に加える。

「…行くぞ。ソードウォリアーでセットされているモンスターを攻撃。光刃一閃」

その合図でソードウォリアーがセットされているモンスターの前ま

で瞬時に移動、斬る構えをとる。

だが、セツトされていたモンスターは石らしき材質で作られた鎧を纏ったサイ…剣闘獣ホプロムス。

ホプロムスは斬りかかろうとしたソードウォリアーの刀を左手で防ぎ、ソードウォリアーごとそれを弾き飛ばす。

「剣闘獣ホプロムス」

効果

4 / 地 / 岩石

ATK / 700

DEF / 2100

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の守備力は2400になる。このカードが戦闘を行ったBP終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ホプロムス」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

兵吾

LP 4000 ↓ 3500

「剣闘獣…か…」

兵吾は自分のデュエルディスクを一瞥した後、守る態勢をとっているホプロムスを見る。

剣闘獣。戦闘を行う度に交換で様々な効果を持つ同シリーズのカードを次々と出してくる厄介な相手だ。

これは迂闊に攻撃するべきではなかったか。

「俺はBPを終了する…」

「ちょっと待ちな！俺はここでホプロムスの効果を発動！こいつをデッキに戻し、剣闘獣ムルミロを攻撃表示で召喚だ！！」そう言った刹那、ホプロムスが光となって一瞬に消え、変わりに巨大な水柱を発生させてその上に乗っている魚のようなモンスター、剣闘獣ムルミロが現れる。

「剣闘獣ムルミロ」

効果

3 / 水 / 魚

ATK / 800

DEF / 400

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊する。このカードが戦闘を行ったBP終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ムルミロ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「ムルミロの効果発動！こいつが「剣闘獣」系統のモンスター効果で特殊召喚した時、フィールド上の表側表示モンスターを1体破壊する！破壊の対象はテメーのソードウォリアーだ！行け！ムルミロ！！」

その言葉を合図にムルミロが水柱ごとソードウォリアーに突っ込む。最初は耐えたソードウォリアーだったがすぐに激流に流されガラスのように碎ける。

「更に俺は伏せてあるハンディキャップマッチを発動！ムルミロをもう1体デッキから特殊召喚！！」

ホプロムスの効果で召喚されたムルミロの左隣にムルミロがもう1体現れる。

「ハンディキャップマッチ！」
通常罨

自分が「剣闘獣」と名のついたモンスターの特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「剣闘獣」と名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「カードを3枚セットし、ターンを終了する」

2ターン目終了現在

涼side

LP / 4000

手札 / 3

モンスター : 2

「剣闘獣ムルミロ」×2

魔法罨 : 1

セット1枚

兵吾side

LP / 3500

手札 / 3

モンスター : 0

魔法罨 : 3

セット3枚

「俺のターン！ドロー！！」

…俺はチューナーモンスター、剣闘獣力エサルを攻撃表示で召喚！」
涼の前に両手に剣を持ち、二足で立っている猿が現れる。

「剣闘獣力エサル」

効果／チューナー

2／地／獣

ATK／600

DEF／800

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードのレベルは4となり、元々の攻撃力は1600となる。このカードが戦闘を行ったBP終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣力エサル」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「…チューナーモンスター…、シンクロか…」

「その通り！俺は 3のムルミロ2体に 2の力エサルをチューニング！」

涼の宣言と同時に力エサルが跳躍して2つの緑色の輪に変身。

続けて涼のフィールドにいるムルミロ2体がその輪に入る。

「頂点に座す獣王よ！その名に恥じぬ力、今ここに解放せよ！シンクロ召喚！！」

吠えろ！剣闘獣ハンニヴァル！！」

涼の前に現れたのは背に巨大な大剣を背負った人型の獅子。

…一見、同シリーズに存在するモンスター「剣闘獣ヘラクレイノス」と似たような格好をしているが鎧の色が白で統一されていたり、盾

を持っていなかったりと色々違う部分があるのが確認出来る。

「剣闘獣ハンニヴァル」

効果／シンクロ

8／地／獣戦士

ATK／2000

DEF／2800

剣闘獣力エサル＋「剣闘獣」と名のついたチューナー以外のモンスター1体以上

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

MP時に自分フィールド上に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスター1体をデッキに戻す事でフィールド上のカード1枚を破壊し、このモンスターの攻撃力をデッキに戻したモンスターの攻撃力の半分の数値をこのターンのみアップする。このカードが戦闘を行ったBP終了時にこのカードをエクストラデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣力エサル」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスターをこのカードのシンクロ素材にしたモンスターの数だけ自分フィールド上に特殊召喚する。

「畏発動、奈落の落とし穴…ハンニヴァルを破壊…」

ここで兵吾が奈落の落とし穴を発動する。
しかし…。

「甘えげ工藤！！カウンター畏発動！神の宣告！！ライフを半分に
して奈落を無効化する！！」

「神の宣告」

カウンター畏

ライフポイントを半分払う。魔法・罾の発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし、それを破壊する。

涼

LP 4000 ↓ 2000

「……………」

兵吾は黙って無効化された奈落の落とし穴のカードを墓地用の収容スペースに入れる。

一方の涼は更に展開を加速させる。

「手札から二重召喚を発動！剣闘獣アングラーを召喚！！」
ハンニヴァルの左隣に防具を装備した隻眼の熊が現れる。

「二重召喚」

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「剣闘獣アングラー」

通常

4 / 地 / 獣戦士

ATK / 1900

DEF / 1500

（通常モンスターの説明は省略させていただきます…作者より）

「行くぜ…、ハンニヴァルの効果発動！アングラーをデッキに戻し、テメーの伏せカードの1枚を破壊！そしてアングラーの攻撃力の半分

… 950をハンニヴァルの攻撃力に加算する！！」

ホプロムスの時と同様、アングルが光となって消え、そしてハンニヴァルが大剣を右手に持って大きく振り、剣圧で兵吾の2枚ある伏せカードのうち、右にある「攻撃の無力化」が吹き飛ぶ。

剣闘獣ハンニヴァル

ATK

2000 ↓ 2950

「BPに移行！ハンニヴァルでテメーに直接攻撃！！
アルティメットビーストブレイド！！」
ハンニヴァルが兵吾目掛けて大剣を振り下ろす。

兵吾

LP 3500 ↓ 550

「……………」

表情一つ変えてはいないが黙りになってしまった兵吾。

そんな彼に対し涼は…。

「どうした？俺の華麗過ぎるタクティクスに酔って言葉が出ないか？
？そう思ってくれるなら嬉しいがおだてても何も出ねえぜ！俺はこ
のままターンエンドだ！！」

…調子に乗っている。

3ターン目終了現在

涼side

LP / 2000

手札 / 1

モンスター : 1

「剣闘獣ハンニヴァル」

魔法罫 : 0

兵吾side

LP / 550

手札 / 3

モンスター : 0

魔法罫 : 1

セット1枚

「俺のターン。ドロー」

どんな劣勢でも無表情で静かにドローする兵吾。

「なあ工藤。テメー本当に谷本に完全勝利したのか？」

「……………」

兵吾に問う涼。

そして黙りのままの兵吾。

「最初はもっとやれる奴だと思ったんだがな…、これじゃ魔瑠井の言う通りだぞ？」

「……………」

兵吾は何も言おうとしない。

「…なあ工藤…」

「それで精一杯か？」

「!?!? どう言う意味だ...」

突然兵吾が口を開く。

「それが... あんたの本気なのかと聞いている...」

「... お、俺は何時でもどんな野郎とでもやる時は本気だ!!」

兵吾の問に涼は答える。

「そうか...。なら単刀直入に言う。あんたは、俺の足元にも及ばない」

「!?!?」

この言葉で、今度は涼が黙りになる。

「腑に落ちないか? なら、証拠を見せてやる。」

俺は戦武兵 サイスヴァルキリーを攻撃表示で召喚する」

兵吾の前に現れたのは兵吾達の年代の少女と全く変わらないであろう15、6歳の少女。

だが、鎧や脚甲を装備しており、そしてその体格以上の大きさを持った片方に刃の付いた大鎌を片手で持っている。

「戦武兵 サイスヴァルキリー」

効果

4 / 風 / 戦士

ATK / 1300

DEF / 300

このカードの召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

- フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。
- 自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「サイスヴァルキリーの効果発動。フィールド上の魔法、罠破壊かドロウ。どちらか1つを選択し、使う事が出来る。俺はドロウを選

択する」

兵吾はそう言うのとデッキから1枚カードを引く。

「手札からダブルアタックを発動。手札のランスロードを捨て、サイスヴァルキリーをこのターン2回、攻撃可能にさせる」

「だがサイスヴァルキリーの攻撃力は1300。2000のハンニヴァルには…」

「更に罨発動、ライジング・エナジー」。

手札を1枚捨て、サイスヴァルキリーの攻撃力を1500アップさせる」

サイスヴァルキリーに赤いオーラが宿る。

「ダブルアタック」

通常魔法

自分の手札からモンスターカード1枚を墓地に捨てる。捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を自分フィールド上から選択する。選択したモンスター1体はこのターン2回攻撃をすることができる。

「ライジング・エナジー」

手札を1枚捨てる。発動ターンのEP時まで、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は1500ポイントアップする。

戦武兵 サイスヴァルキリー

ATK1300↓2800

「な…ハンニヴァルの攻撃を上回った…」

因みに、分かっているとは思うが涼にサイスヴァルキリーの攻撃を防ぐ手段は無い。

「終わりだ。サイスヴァルキリーでハンニヴァルを攻撃。ウィンドスイング」

兵吾の言葉を合図にサイスヴァルキリーが瞬時にハンニヴァルの真上に移動。そしてハンニヴァルの首筋目掛けて、持つてる大鎌を振るう。

頭と胴体を切断されたハンニヴァルは力無く倒れ例によってガラスのように砕ける。

涼

LP 2000 ↓ 1200

「サイスヴァルキリーで直接攻撃」

間髪入れずにサイスヴァルキリーは涼に接近。そのまま涼は斬られる。

涼

LP 1200 ↓ 0

「畜生…負けちゃったぜ…だがなア工藤！次は！次こそはテーマに勝つ…！」

涼はそう言つて兵吾のいる方に指を指す…が。

「って、いねーじゃねえかあッ…！」

涼の空しい叫びがデュエル場にこだまするのであった…。

一方兵吾はデュエル場を後にして1人再び廊下を歩いていた。
デュエルディスクは既に持っているバッグにしまっている。

「大した事の無い相手だったな…」

兵吾は1人呟く。

…実際、彼には…涼にはまだ足りないものが多い。
認める所は認めるが、まだまだ未熟だ。

「所詮はレッド寮…か…」

兵吾はそう言って結論を出し、またブラブラするのであった。

…誰かが影で自分を見ている事に気付かずに。

第3話―烏達の憂鬱（前）（前書き）

かな〜り久々の更新です。

所で、私の事覚えてる方は……………いませんよね……………orz

第3話―烏達の憂鬱（前）

兵吾と涼がデュエルをしていた同時刻。

金髪でショートヘア、そしてやや暗い青色の瞳をしたブルー寮の男子生徒…魔瑠井 竜示は先程の一件に対して愚痴をこぼしつつデュエル場の近くを1人で歩いていた。

「工藤に岡沢め…。全く、本当に気に食わん奴らだ…。…あいつらもあいつらだ。素直にくたばって…」

「あいつら」…とはおそらく兵吾と涼に叩きのめされた男子生徒2人の事だろう。

因みにその2人はトイレに運んだ後、放置したままにいる。

「それ以前に成績の良くなくせに私に楯突くなど…だからレッド寮の連中は…」

…と、こんな感じでグダグダ言ってるその時だった。

「ソードウォリアーでセットされているモンスターを攻撃…」

ふと、デュエル場の方から兵吾の声が聞こえたのに竜示は気がついた。

しかも決闘中のようだ。

竜示は兵吾と相手をしている涼に気付かれない位置からデュエル場を覗く。

「……………」

…例え戦ってる者がレッド同士であつてもついつい見なくなってしまうのは決闘者としての本能なのかもしれない。

いつの間にか竜示は2人の決闘を黙って見続けていた…。

…決闘が終わり、兵吾は再びアカデミア内をうろついていたが、そんな彼を竜示は壁等の兵吾から見えない部分を利用して尾行していた。

…気に食わないと言いながらも何だかんだ言って彼に興味があると

言う理由もあつたが、それと同時に竜示は先程の決闘で兵吾が言っていた事が気になっていた。

『あんたは俺の足元にも及ばない…』

…もしこの言葉が本当ならば、司に完勝できたのも頷ける。その刹那だった。

「大した事の無い相手だったな…」

所詮はレッド寮…か…」

そう兵吾が呟いたのを竜示は確かに聞いた。

その数分後、竜示は尾行を止めて後ろの壁に寄りかかる。

…言い方からしてまだ実力を隠している。どうやらこれは本当の事であるようだ…が、どうにも腑に落ちない。

…ならば、やる事は1つ。

（戦って確かめるべきか…）

竜示はそう考えつつ、制服のポケットからデッキケースを取り出して静かに見つめる。

「まさか…あのような奴と戦いたいなどと思うようになってしまったとはな…」

そう言った竜示は少し悔しそうに、しかしどこか楽しみにしているかのような笑みを浮かべていたであつた。

以前はみすばらしい2階建てのアパートであつたレッド寮。

しかし寮が男女共通になったのに伴い大幅な改築（実際は大規模な作り直し）が施され、今では他の2寮にも負けない程の立派なものとなっている。

その新生レッド寮最大の特徴であるのは、入り口から見て左右二つに分かれた建物である。

まず左側。

Uの字状のように3階建てのものが2つ、枝分かれするように構えているこの建物には生徒の個室が用意されていて、片方が男子でも

う片方は女子が使用している形となっている。

個室の方は今までとは違い1人1部屋ずつ、風呂とトイレが別々に完備されていてテレビやベッド等の家具や電化製品も市販で手に入るそこそこ優秀なものが設置されていたりと、今までとは比べられない程に良くなっている。

そして右側は食堂や、最近新たに発案されたライディングデュエルで使用されるバイク型の乗り物、Dホイールを格納するガレージ等が用意されている生活スペース。

こちらは何かと需要のある場所で、色々な事に利用されている。その食堂で今、今年入った新入生の歓迎会が行われているのだが…。

「これが…レッド寮の飯かよ…」

近くの席に座っていた男子生徒が1人、絶望を込めて言っていたのを涼は黙って聞いていた。

彼等に出された料理は白飯、ハンバーグ、エビフライ、サラダ、ワカメのスープ。

一見、並の家庭で出されるものばかりだが白飯、たくあん、シシヤモのみが夕食であった以前よりは随分進歩した方だ。

では何故そんな絶望に襲われるのか？それは…。

「他の寮がバイキングとかなのに何でここだけこれなんだよ…」

そう、格差である。

ブルー寮は超高級料理のバイキング。

イエロー寮は前菜からデザートまで一流料理のフルコース。

レッド寮はこの世間一般の夕食。

そりゃ不満の一つや二つ出てもおかしくは無い。

「そう言うなって。以前はもっと酷かったんだぞ…」

と、そんな文句を垂れる後輩を先輩達が何とかあやしている中、静かに食している者が1人。

「（あいつ…こんな時も無表情か…）」

そんな涼の目線の先にいるのは兵吾で、食堂にあるテーブルの端付

近に座り1人出された料理を黙々と食べている。

因みにあの後、兵吾とはこの入口で遭遇したが、彼がすぐに自室に籠もってしまった為、コンタクトは失敗に終わっている。

(…あいつ本当に表情を変えねえな…何か、人形とかロボットなんじゃねえかって疑いたくなってるぜ…)

自分の食事にありつきながら涼はそう考え始めていた。

…情を見せない。

…他人と関わりたがらない。

…そして、良くも悪くも自分達とは何かが違う。

それが何なのかは分からないが、彼とはこれから先も関わる事になるだろう。

そう涼が結論を出した刹那、兵吾が自分の食器を乗せたトレーを使用済みのものを引き取るスペースに置きそのまま食堂を後にした。それを見た涼も何を思ったのか自分のトレーを持ち立ち上がる。

「どうした岡沢。もう満腹か？」

そんな涼を不思議に思ったのか、隣に座っている男子生徒が涼に訪ねる。

「ん？まあ、そんな所だ。

…ちよつと散歩がてら外の空気吸ってくる」

涼は適当に返事をして兵吾と同様に食器等を片してから食堂を出て行った。

その頃、兵吾は生活側の建物と住居側の建物を繋ぐ通路兼ロビーにいた。

だが、いるのは兵吾1人だけでは無い。

「また、あんたか…」

そう言った兵吾の前には竜示が左腕にブルー寮用のデュエルディスクを付け、右手に右腕用のデュエルディスクを持って1人で立っていた。

待ち伏せしていたらしく、自室に戻ろうと兵吾がここを通っていた時に彼に呼び止められた。

「まずはこいつを付ける。要件はだいたい分かるだろ？」

言いながら竜示は右手に持っているデュエルディスクを兵吾に投げ渡す。

「拒否権…は無さそうだな…」

せめて理由は教えて貰おうか」

左手で渡されたデュエルディスクを受け取りながら兵吾は質問する。

「貴様の实力を見てみたい。そんな所だ」

「…もう寝たかったのだから…本当に迷惑な奴だ…」

「フン、迷惑で結構だ。」

…ここでは目立つから場所を変えるぞ」

竜示がそう言った後、2人は港と本島を繋ぐ橋へと移動した。

因みにこの場所はレッド寮から1分かからずに着ける。

「準備は良いな？行くぞ工藤！」

デュエルディスクを展開しつつ、竜示は兵吾に向かって叫ぶ。

「（岡沢 涼…奴の話ではこいつは大した事は無いと言っていたが…どうも違うようだな…）」

いいだろう。ブルーの實力、見せて貰う…！！」

兵吾も表情こそは変えないものの、本気であるような勢いある口調で言いながらデュエルディスクを展開する。

「デュエル！！」

「先行は俺から貰うぞ…。俺のターン。」

…サイスヴァルキリーを攻撃表示で召喚し、効果でデッキから1枚ドロ―。

カード1枚セットしてターンエンドだ…」

兵 吾 s i d e

LP / 4 0 0 0

手札 / 5

モンスター : 1

「戦武兵サイスヴァルキリー」

魔法罫 : 1

セット 1 枚

竜 示 s i d e

LP / 4 0 0 0

手札 / 5

モンスター、魔法罫なし

「私のターン！」

モンスターが自分フィールド上に存在せず相手フィールド上にのみ存在する時、こいつはリリース無しで通常召喚が出来る。

来い、BF―暁のシロツコ！」

竜示の場に烏の格好をした男性が現れる。

： 本来はこの後にカードの詳細なのだが、作者がこれで挫折した所があるのでオリカ等以外は略させて頂く。

「まだだ。」

自分フィールド上にBFと名の付いたモンスターが存在する時、手札からこのカードを特殊召喚出来る。

来い、BF―疾風のゲイル！」

シロツコの右横に現在制限カードである疾風のゲイルが並ぶ。

「疾風のゲイルの効果発動。1ターンに一度、相手モンスターの攻守を半減出来る。」

対象はサイスヴァルキリー！」

サイスヴァルキリー

ATK1300↓750

「バトル。疾風のゲイルでサイスヴァルキリーを攻撃！」

「畏発動、攻撃の無力化……！」

この戦闘を無効にし、BPを終了させる……」

「フン、凄いだか。」

カードを1枚セットし、ターンを終了する」

兵吾side

LP/4000

手札/5

モンスター……1

「戦武兵サイスヴァルキリー」

魔法罫なし

竜示side

LP/4000

手札/3

モンスター……2

「BF―暁のシロツコ」

「BF―疾風のゲイル」

魔法罫……1

セット1枚

「俺のターン……」。

（シロッコにゲイル…。どちらも居ると後々困る連中だ…片方だけでもこのターンで始末するか…）戦武兵　フイストグラップラーを召喚…。」

兵吾の前に両腕に鉄製の巨大な拳を装備したボクシング選手のような男性が現れる。

「戦武兵　フイストグラップラー」
効果

3 / 地 / 戦士

ATK / 1200

DEF / 500

このカードの召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更できる。

「フイストグラップラーの効果発動…。

表側表示のモンスター1体の表示を変更する…。

対象は疾風のゲイルだ…。」フイストグラップラーが拳を突き出し、その先にいる疾風のゲイルがまるで衝撃波でも受けたかのように体をのけぞった後、守備表示の構えになる。

「バトル…フイストグラップラーで疾風のゲイルを攻撃…。

轟天拳…！」

兵吾が言った瞬間、フイストグラップラーが大きく跳躍し、右腕で疾風のゲイルを叩き付けるように殴る。

「サイスヴァルキリーを守備表示に変更しカードを1枚セット…。
ターンエンドだ…。」

兵吾 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター… 1

「戦武兵サイスヴァルキリー」

「戦武兵フィストグラップラー」

魔法罫… 1

セット1枚

竜示side

LP / 4000

手札 / 3

モンスター… 1

「BF―暁のシロツコ」

魔法罫… 1

セット1枚

「私のターン。」

私は、BF―銀盾のミストラルを召喚！」

竜示の場に銀色の鎧のようなものを付けた鳥…銀盾のミストラルが現れ、シロツコの頭上に乗る。

「行くぞ！ 5 暁のシロツコに 2 銀盾のミストラルをチューニング！黒き烈風よ。天空を占める猛禽となれ！」

シンクロ召喚、来い！BF―アーマード・ウイング！」

シンクロ召喚の際の発光後、竜示の場に出て来たのは黒ずくめの格好をした鳥人でBFのエース格の1体、アーマード・ウイング。

「まだだ！罫発動、リビングデッドの呼び声！」

墓地の銀盾のミストラルを特殊召喚する！

そして、場にBFと名の付いたモンスターが存在する時、このモンスターを特殊召喚出来る！来い、BF―黒槍のプラスト！」

「（レベルの合計は6…となると…）アームズ・ウィングか…！？」
「フン、カードの知識はあるようだな。」

4黒槍のブラストに 2銀盾のミストラルをチューニング！漆黒の力翼に宿りし時、天地に神風が巻き起こる！

シンクロ召喚、吹き荒べ！BFアームズ・ウィング…！」

追い討ちをかけるかのようにアームズウィングがアーマードウィングの隣に現れる。

「バトル。」

アーマード・ウィングでフィストグラップラーを、アームズ・ウィングでサイスヴァルキリーを攻撃！

尚、アームズ・ウィングは守備表示モンスターを攻撃の際攻撃力が500ポイント上がり、貫通ダメージを与える！

ブラック・ハリケーン！ブラック・チャージ…！」

「速攻魔法発動、収縮…。」

アーマード・ウィングの攻撃力を半減させる…！」

「だが、ダメージは受けて貰おうか」

「ッ……………！」

兵吾

LP4000↓1350↓1300

「フッ…無様だな工藤。」

私はこれでターンエンドだ。」

兵吾side

LP/1300

手札/4

モンスター、魔法罫なし

竜示 side

LP / 4000

手札 / 2

モンスター : 2

「BF―アーマード・ウィング」

「BF―アームズ・ウィング」

魔法罫 : 1

リビングデッドの呼び声

(使用済み)

「俺のターン…。」

…手札断殺を発動…。お互いにカード2枚を墓地に送り、デッキからカード2枚をドロ…。」

「(フン…工藤の奴、賭けに出たか。だが…、私が引いたのは月影のカルート。攻撃して来たら返り討ちにしてくれる…)」

竜示がそう考えている中、兵吾は…。

「手札から戦線復帰を発動…。墓地のソードウォリアーをライフを800支払い特殊召喚する…。」

「!?!何故ソードウォリアーが墓地に…!」

…断殺か!」

兵吾

LP 1300 ↓ 500

「戦線復帰」

通常魔法

ライフを800ポイント支払って発動する。

自分の墓地に存在する「戦武兵」と名の付いたモンスター1体自身フィールド上に特殊召喚する。

このカードの効果によって特殊召喚されたモンスターは効果は無効化され、攻撃力と守備力が1000ポイント下がる。

兵吾の前にソードウォリアーが現れるが…包帯で所々巻かれていたり、血が滲んでいたりと、少し痛々しい姿である。

「チューナーモンスター、戦武兵ダガーアサシンを召喚し、効果発動…」。

墓地のレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚出来る…。

戦武兵シールドマシナリーを特殊召喚…」

「戦武兵 ダガーアサシン」

効果/チューナー

3/風/戦士

ATK/1000

DEF/500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する 2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化され、攻撃宣言をする事もできず、リリースする事もできない。

「戦武兵 シールドマシナリー」

効果

1/光/機械

ATK/0

DEF / 0

相手モンスターの攻撃宣言時、表側表示のこのカードをリリースする事でその攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

兵吾の場に出て来たのは忍者のような容姿で左手にナイフ、右手にクナイを4本、指の間に挟んで持つ男性と、所々に盾のような印象を与えるような部分があるロボット。

おそらく忍者がダガーアサシンでロボットの方がシールドマシナリーだろう。

「4ソードウォリアーと1シールドマシナリーに3ダガーアサシンをチューニング…。誇り高き剣客よ…。雷纏う刃持ちし夜叉となりて全てを断て…！」

シンクロ召喚、斬れ…。戦武兵 菊一文字…！！」

ソードウォリアー、シールドマシナリーの2体とダガーアサシンが出した光の輪によって生み出されたのは、着ている服に鎧等を追加し、太刀の他に脇差し等の剣を数本携えたソードウォリアー。

また顔立ちも10代後半のものから20代の後半ぐらいになり、年を食った事が伺える。

「戦武兵 菊一文字」

効果 / シンクロ

8 / 光 / 戦士

ATK / 2500

DEF / 1000

チューナー+「戦武兵 ソードウォリアー」を含むチューナー以外のモンスター2体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで選択して破壊出来る。
。このカードの効果は魔法、罠、効果モンスターの効果では無効化されない。

「菊一文字の効果発動…。

このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊出来る…。

俺が選択するのはアーマード・ウィングとアームズ・ウィングの2枚だ…。

抜刀術 紫電…！」

兵吾の掛け声と同時に菊一文字が居合いの構えを取り、一瞬でアーマード・ウィングとアームズ・ウィングの後ろに移動。それと同時に、2体共真つ二つになる。

「しまった…！（カルートの事で油断してしまったか…！）」

「これでがら空きだ…。

菊一文字で直接攻撃…。

雷光滅刃閃…！」

「グアツ！」

菊一文字が効果で現れた位置から一気に間合いを詰め、電気が纏っている刃で竜示を斬る。

竜示

LP4000↓1500

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ…」

兵吾side

LP/500

手札/0

モンスター…1

「戦武兵 菊一文字」

魔法罫…1

セット2枚

竜示side

LP/1500

手札/2

モンスター…0

魔法罫…1

リビングデッドの呼び声

(使用済み)

「私のターン！」

…BF―極北のブリザードを召喚！

そしてこのカードの効果により、墓地の黒槍のプラストを特殊召喚する！

そして自分の場にBFと名の付いたチューナーが存在する事によりこのカードを墓地から特殊召喚する。

来い、BF―共存のルッピン！」

竜示の場にブリザード、プラスト、そして縦笛の入ったランドセルを背負った烏…ルッピンが次々と出て来る。

「BF―共存のルッピン」

効果

2 / 闇 / 鳥獣

ATK / 800

DEF / 800

自分フィールド上にBFと名の付いたチューナーが存在する時、墓地からこのカードを特殊召喚出来る。

この効果で特殊召喚した場合、このカードは攻撃宣言を行えず、E P時に除外される。

「まだ来るか…しづといな…」

で、何だ…？次は孤高のシルバー・ウィンドか…？」

「…違うな。それ以前に、シルバー・ウィンド自体私は持って無い。…もう少し、別のものだ」

「別のもの…？」

兵吾からの問いを聞いた後、竜示は一旦深呼吸をしてから口を開く。
「…そうだ。」

…本来ならば、使いたくなど無いのだがな…。

4 黒槍のブラストと 2 共存のルッピンに 2 極北のブリザードをチューニング！黒き疾風よ、秘めたる力を解放しその翼に現出せよ！

シンクロ召喚！吹き狂え…ブラックフェザー・ドラゴン…！」

竜示の後ろ吠えながら出て来たのは、白い翼が生えた鳥を思わせるような黒い龍。

そして…、兵吾にとって全く見た事の無いモンスターだった。

「な…、何だこのモンスターは…！？」

何時も人形のような顔である兵吾の顔が驚愕で満ちる。

そんな兵吾に、ブラックフェザー・ドラゴンを見上げながら竜示が

答える。

「これは、まだ市販では売られる事の無いテスト段階のシンクロモンスターだ。

訳あって私が不本意ながら使う事になっている。だから本来他人のカードであるこいつは極力使いたくは無かった。

…だが、貴様のポーカーフェイスが崩れた分としては…一杯食わせやった事に対しては良しでしょう」

そう言つて、竜示の視線はブラックフェザー・ドラゴンから兵吾へと移る。

「（今の手札では、こいつの能力は使えないか…それがあれば確実に止めを刺せたのだから…）さて、話はここまでだ。止めは刺せんが…菊一文字は破壊させて貰う。

…やれ、ブラックフェザー・ドラゴン。

…ノーブルストリーム！！」

…その数秒後、レッド寮付近の橋がソリッドビジョンによる赤い光に包まれた。

第3話―烏達の憂鬱（前）（後書き）

……とりあえず不定期な更新になりますが、暖かく見守って下さ
い……。

第4話―鳥達の憂鬱（後）（前書き）

インフェルニティにトリシューラ・・・。

ここから数ヶ月、環境が凄い事になるだろうな・・・。

第4話―鳥達の憂鬱（後）

「…やれ、ブラックフェザー・ドラゴン。奴の菊一文字を葬り去ってしまえ！」

ノール・ストリーム！！」

竜示の掛け声により、ブラックフェザー・ドラゴンが赤い光の球を口から放ち、その数秒後に橋全体を覆う程の爆発を起こす。

「（やったか…）」

そう思いながら竜示は兵吾の方を凝視する。

実際のものでは無いが、爆発によって発生した煙で視界が悪い。モニターを細部まで立体化させるソリッドビジョンの技術は体したものだが、時にはこの技術も考え物だ。

煙が少しずつ消え、兵吾の方も見えてくる。

そしてその兵吾の場には…、何事も無かったかのように菊一文字がいた。

「！？何故だ！何故貴様の場に菊一文字がいる！私は確かに…」

「ああ、あんたは確かに菊一文字を攻撃した…」

少なくとも、攻撃だけはな…」

「どう言う意味だ…！」

竜示が問うように言った後、兵吾は自身のデュエルディスクに差し込んだあるカード1枚を取り出し、竜示に見せるように答える。

「あんたのブラックフェザー・ドラゴンが攻撃する際、俺は伏せておいたこのカード…、ドレインシールドを発動させて貰った…」。

これによりバトルは無効、そして俺はブラックフェザー・ドラゴンの攻撃力2800を自分のLPに加算する…」

兵吾

LP500↓3300

「チツ、迂闊だったか…。

…手札からブラックフェザー・リカバリーを発動。

手札を1枚捨て、墓地のアーマード・ウィングを除外する事でアーマード・ウィングの攻撃力の半分、1250を回復する」

竜示

LP1500↓2750

「ブラックフェザー・リカバリー」

通常魔法

手札を1枚捨て、自分の墓地に存在するBFと名の付いたモンスター1体を除外して発動する。

除外したモンスターの攻撃力の半分ライフポイントを回復する。

「私は、これでターンエンドだ」

兵吾side

LP/3300

手札/0

モンスター…1

戦武兵 菊一文字

魔法罫…1

セット1枚

竜示side

LP/2750

手札／0
モンスター…1
ブラックフェザー・ドラゴン
魔法罫…1
リビングデッドの呼び声
(使用済み)

「俺のターン…。
…菊一文字を守備表示に変更…。
カードを1枚セットしターンエンドだ…」

兵吾side
LP／3300
手札／0
モンスター…1
戦武兵 菊一文字
魔法罫…2
セット2枚

竜示side
LP／2750
手札／0
モンスター…1
ブラックフェザー・ドラゴン
魔法罫…1
リビングデッドの呼び声
(使用済み)

「私のターン。」

…工藤、どうやらこのデュエル、私の勝ちのようだ。

このカードはライフを800支払う事を条件に手札から特殊召喚出来る。

出でよ、BF―迅雷のピビッチ!」

ブラックフェザー・ドラゴンの右横から鬼のような仮面を顔からずらして付けている黄色い体色の烏が現れる。

「BF―迅雷のピビッチ」

効果

3 / 闇 / 鳥獣

ATK / 800

DEF / 1200

このカードは、ライフを800支払う事で手札から特殊召喚する事が出来る。

MP時、自分の墓地に存在するBFと名の付いたモンスター1体を除外する事でこのカードを手札に戻す。

だがピビッチが出て来た時、兵吾は1つの異変を感じていた。

「ピビッチの能力が発動しない…?」

デュエルディスクは基本、互いのLPや場や墓地の状況の情報は最低分かるようになってる。

…と言っても、アニメ等では確認するような描写は無いが（以前5D・sであった鬼柳とロットン戦が主な例である）。だが今のピビッチの効果…竜示のライフが減る事は兵吾のデュエルディスクでは確認出来なかった。

「いや、発動はした。…無効化はされたがな」

そんな兵吾に竜示はまるで分かりきっていたかのような表情で口を開く。

「無効化された…！？まさか…！」

「そうだ。このブラックフェザー・ドラゴンは、カード効果によるダメージを受ける代わりに、このカード自身に黒羽カウンターを置く効果を有している。

黒羽カウンター1つにつき自身の攻撃力が700下がるというデメリットがあるがな」

ブラックフェザー・ドラゴン

ATK2800 ↓ 2100

「黒羽カウンター…？」

「フン、いずれ分かる。

迅雷のピビッチ効果発動。自分の墓地のBFと名の付くモンスター1体を除外し手札へと戻す。疾風のゲイルを除外しピビッチを手札に。

その後、ピビッチを自身の効果で再び召喚。墓地のアームズ・ウィングを除外し手札へ。

更に効果で召喚。ミストラルを除外し手札に。

召喚、シロッコ除外で手札へと…。」

召喚しては手札へ戻し…と同じ手を何度も繰り返す竜示。

その度に後ろのブラックフェザー・ドラゴンが吠え、羽のが少しずつ、白から赤と黒の2色へ染まっていく。

ブラックフェザー・ドラゴン

ATK2100 ↓ 1400 ↓ 700 ↓ 0

「（…何を考えているんだ…同じ手をずっと…。）」

不信任を抱きつつ、兵吾は心の中で呟きながらブラックフェザー・ドラゴンを…その色が変わってゆく翼を見る。

「こいつ…先と翼の色が違う…？」

「それがブラックフェザー・ドラゴン本来の翼だ。…真価を発揮する為のな！」

ブラックフェザー・ドラゴン効果発動！１ターンに１度このカードに置かれている黒羽カウンター全てを取り除き相手フィールド上の表側表示モンスター１枚の攻撃力を置かれていた黒羽カウンター数×７００ダウンさせ、ダウンさせた数値分をダメージとして相手に与える！対象は無論、菊一文字！

よって、菊一文字の攻撃力は０となり、貴様に２５００のダメージを与える！

ブラックバースト！！

「ッ！菊一文字…！！」

兵吾

LP 3300 ↓ 800

戦武兵 菊一文字

ATK 2500 ↓ 0

「今後こそジ・エンドだ。

ブラックフェザー・ドラゴンで菊一文字をk…」

「待て…畏発動、リミット・リバース…！」

この効果により、シールドマシナリーを特殊召喚する…」

「そんなポンコツ、今更どうと言う事も無いわあ！」

行けブラックフェザー・ドラゴン！ノーブル・ストリーム！！」
先程と同様、ブラックフェザー・ドラゴンから光の球を放つ。

「どうか…シールドマシナリー効果発動…！」

相手の攻撃宣言時、このカードをリリースする事でその攻撃を無効にし、B Pを強制終了させる…！」

そう兵吾が言った後、シールドマシナリーがロボットの状態から変形して大きな盾となつて光の球を防いだ。

「クソ！貴様、1度ならず2度までも…！」

「全てがあんたの思うように行くとおもうなよ…。で、どうするんだ…！」

「チツ…ターンエンドだ！」

兵吾 side

LP / 800

手札 / 0

モンスター… 1

戦武兵 菊一文字

魔法罫… 2

リミット・リバー

(使用済み)

セット1枚

竜示 side

LP / 2750

手札 / 1

モンスター… 1

ブラックフェザー・ドラゴン

魔法罫… 1

リビングデッドの呼び声

（使用済み）

「俺のターン…！（さて、状況は最悪…。どうする…）」

兵吾は冷静に相手の場を…ブラックフェザー・ドラゴンを一瞥する。

「（こいつがいる限りガードでのダメージは無力…。むしろ自殺するようなものだ…。…これに賭けてみるか…）手札からアドバンスドロー発動…」。

菊一文字をリリースし2枚ドロー…！

次に貪欲な壺発動…！

ソードウォリアー、サイスヴァルキリー、フィストグラップラー、ダガーアサシン、菊一文字をデッキ、エクストラデッキに戻し、シヤッフル後2枚ドロー…！」

兵吾は墓地のスペースから宣言したガード5枚を取り出し、デッキに組み込む。

因みに今兵吾達が使っているデュエルディスクは最近発見された新エネルギーである「モメント」を使用したオートシヤッフル機能付きの最新型なので、最初のようにデッキの取り外しは行わない。

「1ターンに3枚か…」

「更に手札から逆転の宝札を発動…！

LPを半分支払い2枚ドロー…！」

「馬鹿な！？1ターンに手札を4枚に増やすだと…！！？」

「逆転の宝札」

通常魔法

自分のLPが1000以下で相手より少ない場合、LPを半分支払って発動。デッキからカードを2枚ドローする。

このカードを発動したEP時、自分の手札を全て除外しこのカードを発動してから3ターン目のEPまで自分はドロー出来ない。

兵吾

LP 800 ↓ 400

「行くぞ…」

自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが存在する時、このカードを手札から特殊召喚出来る…。

来い、戦武兵メイスビショップ…!!」

兵吾の場に片方に所々に棘がある巨大な鉄球を付けた棒を片手で持つ、修道女を思わせる鎧を付けた女性が現れる。

「戦武兵 メイスビショップ」

効果

5 / 光 / 戦士

ATK / 1000

DEF / 1500

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からこのカードを特殊召喚出来る。

「カードを2枚セットし、そのうちの1枚、大嵐発動…！
魔法、罫全て破壊…！」

「自分のカードごと…!!？」

「そしてこの瞬間、チェインしてスターライト・ロード発動…！
大嵐の効果を無効にし、このカードを特殊召喚する…！」

舞え、スターダスト・ドラゴン…!!」

ここで兵吾の場に、白と水色に近い色の2色の皮膚で膜の翼を生やした龍が現れる。

「このモンスター…！？何故貴様が所持している…！」

「ペガサスから貰った…。戦**こいくさ**武兵と一緒に…」

「だが、私の場のブラックフェザー・ドラゴンの攻撃力は2800！
たかが2500のスターダストに…！！」

「セカンド・ブースター通常召喚…。」

そして効果発動…！

このカードをリリースし、スターダスト・ドラゴンの攻撃力を1500アップさせる…！！」

スターダスト・ドラゴン

ATK2500↓4000

「な…に…！？」

「スターダスト・ドラゴンでブラックフェザー・ドラゴンを攻撃…！
シューティング・ソニック…！！」

スターダスト・ドラゴンの口から白い衝撃波のようなものが放たれ、
ブラックフェザー・ドラゴンを貫く。

竜示

LP2750↓1550

「速攻魔法、突進を発動…！」

メイスビショップの攻撃力を700アップ…！！」

戦武兵メイスビショップ

ATK1000↓1700

「これで終わりだ…！メイスビショップでダイレクトアタック…！
スティールインパクト…！！」

「う、うわああああああッッッ！！」

竜示

LP1550↓0

竜示の頭にメイスビショップが棒の鉄球部分を叩き付ける。同時に竜示のデュエルディスクからライフが0になった事を知らせるアラームが流れ、ソリッドビジョンが消える。

そして同時に、竜示も地べたへ座り込む。

「俺の勝ちだ…」

…もう帰って良いだろ…？」

「クソ…好きにしろ…！」

半ば自暴自棄であるかのような竜示の返事を聞いた後、兵吾は付けたデュエルディスクをその場に置いてレッド寮に戻っていった。

「…クソッ！クソックソックソッッ！！」

兵吾が去った後、何度も地面に自らの拳をぶつける竜示。

…相当悔しかったのだろう。

「クソ…！油断は無かった…」

最善のプレイングをした…！

なのに…！！」

「それぐらい奴は強かった…って事だろ、竜示」

「！？岡沢…貴様か…。…何の用だ？」

「ハア、相変わらずその他人行儀な呼び方は止めたらどうだ。

何だかんだ言って昔馴染みだろ、俺ら」

橋の物陰から出て来た少年…涼が竜示の近くへ寄って橋の手すりに寄りかかる。

「フン！誰が貴様等など！！」

「ヘイヘイ、そーでしたねー。」

頭のお堅いエリートで手下だっている竜示君は俺らなんか目じゃ無いですよねー。

ならブラックフェザー・ドラゴンを初めとするBFデッキは回収って事で…」

「ちょ、それだけは止めてくれ！一応大事にはしているんだ！！
って、何故BFまで！！」

「冗談だつての。」

「たたく、単なるジョークまで真に受けやがって…」

「真に受けて悪かったな…たたく…」

…水野はどうしてる？」

「今頃部屋でゆっくりしてんじゃねえか。」

…イエローだからよく分からねえけど」

「…そうか」

そう言つて竜示はブラックフェザー・ドラゴンのカードを手に持つて見つめる。

「…今の感じじゃ、こいつを託してくれた奴にはまともに顔を見せられそうに無いな…」

「何か言つたか？」

「何でも無い。…私もそろそろ戻るぞ」

そう言つて竜示は兵吾が置いたデュエルディスクを持って去つて行った。

「俺も戻るか、…冷えてきたし。」

そう言つて涼もレッド寮の方へと歩いて行つた。

第4話―元氣娘と気高き皇女（前）

……………何時からいたのだろうか。

目を上げた瞬間、兵吾の眼前に広がっていたのは目を閉じる時まで見ていた寮の自室の天井では無く上下左右すら分からない虚無の真っ白な空間。

兵吾は気付いたらそこに水の中にいるかのように横になっていた。

「……………ここは……………一体……………？」

状況を確認する為に辺りを見回したり手足を動かそうとするが、見渡す限り白い空間しかなく、体を動かそうにも首辺りから下が金縛りにあつたかのように動かない。

「……………クツ……………何で動けない……………」

（教エテアゲヨウカ？）

何とか体を動かそうと試行錯誤している兵吾に突然子供のような声が向けられた。

「！？誰だ……………」

咄嗟に周囲を警戒しながら声を発しようとする兵吾。

しかし、その言葉を完全に言う前に空間が歪み映像のような空間が広がった。

「な……………これは……………！！！」

兵吾はそれを見た瞬間、顔に絶望に満たしながら完全に黙らざるを得なかった。

そこに広がっていたのは、実験室のような空間に転がっている大量の「嘗て人だったもの」の塊と尻餅をついて涙と鼻水で顔がグチャグチャになったボロボロの幼い少年、……………そして血まみれになった白い服を着て、右腕にデュエルディスクを付けた幼少時の自分。

『止めて……………許して！殺さないで！お願いだから！！』

『……………ダイレクトアタック』

『嫌だ！死にたくない！誰か……………アアアアアッツツ！！』

兵吾は眼前に広がる光景を……少年が人でなくなる瞬間をただ見ている事しか出来なかった。

いや、見ようが見まいが関係無かった。

こんな光景を見ずとも自身の脳裏に焼き付いている。

「俺の……記憶……！？」

それは兵吾自身、忘れたくとも忘れられない……いや、忘れてはならない忌々しき記憶。

自身が以前いた組織での出来事の一片である。

（思イダシタカイ？人ヲ殺ス為ダケニ生ミ出サレタ才人形サン）

「こんなものを……何で今更！！」

我に戻った兵吾は目をそらし、悲しみを含めた声で叫ぶ。

（ソナモノ、自分ガ一番ヨク知ツテルダロ？自ラガ経験シタ過去ト自分ノ力ガ原因デ他人ガ傷付キ、離レ、ヤガテ憎悪ノ対象トナル！）

「……………」

（現ニ今孤独ナノハ同じ過チヲ繰リ返シタク無イカラダロウ？アノ時ダツテソウダツタ。大切ナモノガ自ラ壊レ、碎ケ散リ、ソレデ絶望シテアンナ取り返シノツカナイ事ニナッタ！）

「違……………」

（何時モ無表情ナノモ感情ヲ殺シテルカラダロ？人ヲ殺メルノニ一番邪魔ナノハ感情ダカラネ）

「違……………俺は！」

（違ワナイサ。ドチラニセヨ君ハモウソナ発言ガ出来ル立場ノ人間ジャナイ！モウ君ハ只ノ生キル兵器ダ！！）

「違……………俺はア！！」

我を忘れて叫ぶ兵吾。

だがその時兵吾の視界に広がっていたのは寮の自室で、Lの字状にベッドの上にいた。

「……………夢か」

兵吾は確認するように言いながら汗だくになった顔に手を当て深呼吸

吸した後、時計を一瞥する。

時間はまだ6時半近く。始業までの時間はまだある。

「シャワーでも浴びるか……………」

兵吾はそう言つて個室の風呂場にへと入つて行つた。

8時45分。

これがデュエルアカデミアの始業時間で、生徒は皆それまでにそれぞれの教室へ着席する事になっている。

因みに多くの生徒達はこの15分前に登校するのが大半で、教室内や廊下は大抵騒がしくなり、席の方も皆思うように取りづらくなる。その為、早めに登校して事前に席を取り、始業まで暇を潰す者も少なからずいる。

兵吾はこの後者の方に当たり、始業式から今日までの3日間後はろ隅の方の席を取つて本を呼んだりしている。

だが、今日はそのような事をせずに、昨夜見た夢の事についてずっと考え込んでいた。

幼き日の……………人としてすら扱われる事無く過ごした過去。

その一部分を鮮明に再現した夢を兵吾は今までも何度も見ている。

「（俺は、未だ過去に囚われている……………と言つ事なのか……………」

兵吾自身、まだそうなのかは分かつてはいない。

だが、あの時負つた苦痛や贖罪は一生背負わなければならない。そこはもう覚悟を決めている。

……………と、簡単な結論を決めた時だった。

「あのー、ちよつと良い？」

不意に左から声が聞こえた為、最小限の動きで半ば睨むかのような形で声のする方を向く。

2人の女子生徒だ。1人はレッドで、背中に付くか付かないか程の黒髪ストリート、茶色がかつた瞳と同年代の女子よりも丰满な胸が印象的な「可憐」や「天真爛漫」と言うような言葉が似合う少女。

もう1人はブルーで、茶色の瞳と青色の肩近くまであるショートヘア、こちらもう1人の方までではないもののバランスの取れたスタイルで、品格がありそうな雰囲気放つ少女。

そしてお互い座れる席が無いのか勉強道具が入ったカバンを持っている。

「この席、2つ共使わないよね？良かったら座って良い？」

レッドの方の女子生徒が優しい口調で兵吾に言う。

「好きにしる……」

「本当！？ありがとう！！」

兵吾の言葉を聞いた矢先、少女に笑顔が満ち、そのまま兵吾の左隣へと座りもう1人の少女も開いた彼女の左隣へと座る。

「そう言えば、名前聞いてなかったよね？えっと……」

「兵吾だ。工藤兵吾……」

「それじゃ、兵吾君だね。私、葉月唯」

「私は宇佐美清音よ。宜しくね、工藤君」

清音と言うブルーの少女も微笑みながら気さくに話しかける。

「清音は凄いなだよ。入学試験の成績が筆記2位、実技4位、総合5位なんだから！」

「俺は総合3位だがな……」

「嘘！？じゃあ何でレッドなの？」

「さあな、興味無い……」

「興味無いって……」

無関心であるかのように言い放つ兵吾に半ば呆れながらつつこむ清音。その直後、クロノスが教室にスキップしながら入ってくる。

「皆スア〜ん！楽しい楽しい授業の時間なノ〜ネ！そして今日はお待ちかねの実技の時間なノ〜ネ！！」

今日は軽く組んだ者同士でデュエルを行って貰うノ〜デ、3人1組になって体育館に移動して下さいなノ〜ネ！」

クロノスが話を終えて教室から出た後、組む者を探す者がいる為なのか一気に教室内がざわめきだした。と同時に唯が兵吾に向けて不

意に話しかけてきた。

「ね、兵吾君は組むあてとかはあるの？」

「いや、特には無いが……………」

「それじゃ、唯達と組もう！兵吾君のデュエルも見てみたいし……………」

……

「唯の言う通りね。総合3位の貴男の実力がどんなものか、私も興味あるし」

唯の意見に賛同するように清音も兵吾に向けて言う。

「でしょ！ね、清音もこう言ってるんだし、一緒に組もう！！」

「……………好きにしる。その方が組む相手を探さずにすむ。だが俺は……………」

……………」

「やった♪そうと決まったら早く体育館に行こ！」

「待て、俺は別に……………」

「諦めなさい工藤君。唯、こうなったらもう止まらないから……………」

「ハア、何でもこうなるんだ……………」その後、兵吾は2人に半ばデートで彼女に振り回される彼氏の如く両腕を掴まれて体育館まで行く事となった。

そして場所は体育館。兵吾達が来た時には既に組んだ者達がデュエルをしていた。

「で、最初はどつするの？」

「勿論、唯と兵吾君！！」

「……………ですって工藤君。ま、頑張りなさい」

「……………ああ」

その後、兵吾と唯が各々のデュエルディスクを付けて相對するよう
に、清音が横で見る形で立つ。

「よし！兵吾君は準備良い？」

「構わない。やってくれ……………」

「それじゃ、デュエル！」

「デュエル……！」

「先行は唯から行くよ、唯のターン！」

唯はナチュル・バタフライを召喚！」

出てきたのはアニメのような感じの蝶。

「カードを1枚セットしてターン終了だよ」

唯 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター……1

ナチュル・バタフライ

魔法罫……1

セット1枚

兵吾 side

LP / 4000

手札 / 5

モンスター、魔法罫……0

「俺のターン……」。

（ナチュル・バタフライには攻撃制限の効果がある……、攻撃しても無駄か……）ソードウォリアーを攻撃表示で召喚し効果発動……。シールドマシナリーを手札に加えた後、カードを2枚セットしターンエンドだ……」

唯 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター : 1

ナチュル・バタフライ

魔法罫 : 1

セット 1 枚

兵吾 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター : 1

戦武兵ソードウォリアー

魔法罫 : 2

セット 2 枚

「唯のターン！

唯はナチュル・ビートルを召喚！そして収縮を発動！ソードウォリアーの攻撃力を半分にするよ！」唯の場にカブトムシのような取るモンスターが現れ、同時に兵吾のソードウォリアーの体長が半分に縮む。

戦武兵ソードウォリアー

ATK 1600 ↓ 800

「更に魔法を発動した事によりビートルの攻守を反転！」

ナチュル・ビートル

ATK 400 ↓ 1800

DEF 1800 ↓ 400

「バトル！」

ナチュル・ビートルでソードウォリアーを攻撃！

ビートルランス！」

唯の掛け声によりナチュル・ビートルが飛翔。ソードウォリアー目掛けて突っ込む。

「畏発動、エクサス・サモン……………！ソードウォリアーを手札に戻し、シールドマシナリーを特殊召喚する……………！」

「エクサス・サモン」（アニメオリジナル）

通常罠

攻撃対象となった自分フィールド上のモンスター1体を手札に戻す事で発動する。手札から戻したモンスターよりも攻撃力の低いモンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する。

「なら、バタフライでシールドマシナリーを攻撃！」

ソードウォリアーが消えた事により、自らの場へ戻ろうとするビートルの変わりに今度はバタフライが唯の掛け声を合図にシールドマシナリーへ突貫する。

「シールドマシナリー効果発動……………！自身をリリースし攻撃を無効、BPを強制終了する……………！」

突っ込んで来るナチュル・バタフライをシールドマシナリーが盾に変形して受け止める。

「うー、攻撃ぐらい通させてよー…………唯はこのままターン終了だよ」

唯 side

LP / 4000

手札 / 3

モンスター… 2

ナチュル・バタフライ

ナチュル・ビートル

魔法罫… 1

セット 1 枚

兵吾 side

LP / 4000

手札 / 4

モンスター… 0

魔法罫… 1

セット 1 枚

「俺のターン…………！」

再度ソードウォリアーを召喚、効果でダガーアサシンを特殊召喚…

…………！」

「その前に手札のナチュル・コスモスピートを効果で特殊召喚！守備表示だよ！」

「俺は手札から戦線復帰を発動しシールドマシナリーを特殊召喚…

…………！そして 4 ソードウォリアーと 1 シールドマシナリーに 3 ダガーアサシンをチューニング…………！」

誇り高き剣客よ。雷纏う刃持ちし夜叉となりて全てを断て…………！」

シンクロ召喚、斬れ。戦武兵菊一文字……………！」
モンスターが光の輪に包まれ兵吾の場に菊一文字が公の場に初めて現れる。

兵吾

LP4000↓3200

「出たわね、戦武兵の……………工藤君のエースモンスター……………」
「違うな。戦武兵としてならそうだがこのデッキ自体のエースは他のものだ……………」

菊一文字の効果発動、ナチュル・バタフライとビートルを破壊する……………抜刀術紫電！」

「そんな……………キャッー！」
菊一文字が居合い斬りでナチュル2体を両断し、その時発生した電気が飛び散る。

「まだだ、畏発動ハーフ・エイト……………！菊一文字を除外し戦武兵サイスヴァルキリーと戦武兵ランチャートルーパーを特殊召喚する……………！」

菊一文字が一瞬で消滅すると同時に、サイスヴァルキリーとRPGを装備したメタルギアのFOX兵を思わせるような男性が現れる。

「ハーフ・エイト」

通常罾

自分フィールド上の 8シンクロモンスター1体を除外する事で発動する。

自分のデッキから 4戦士族モンスター2体を特殊召喚する。
このカードの効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化され

る。

「戦武兵 ランチャートルーパー」

効果／チューナー

4／光／戦士

ATK／1300

DEF／1200

このカードの召喚に成功した時、手札を1枚墓地へ送る事でフィールド上のカード1枚を破壊する。この効果を使用した場合、このカードはチューナーとして扱えない。

「更にモンスターを召喚！？しかもチューナーって……………まさか！！」

驚く清音に、兵吾は忠告するかのように口を開く。

「そう言えば、あんたにはまだ言っていない事があったな……………」

「え？」

「俺の入学試験の結果は総合3位、筆記5位、そして……………実技1位だ……………」

「……………」

「行くぞ……………！ 4サイスヴァルキリーに 4ランチャートルーパーをチューニング……………！」

天空を駆ける白き流星、その軌跡は風となりて大いなる大地へ降り注ぐ！

シンクロ召喚！舞え、スターダスト・ドラゴン……………！！

兵吾の場に白を基調とした龍…………… スターダスト・ドラゴンが現れる。

因みにこちららも公では初めて見せるものとなる。

「まさか……………これが工藤君の！？」

「……………そうだ。こいつが俺のエース、スターダスト・ドラゴンだ……………！！」
バトル、スターダスト・ドラゴンでナチュル・コスモスビートを攻撃。シューティング・ソニック……………！！」
種のような形状のナチュル・コスモスビート目掛けてスターダスト・ドラゴンから白い衝撃波が放たれる。

「畏発動、炸裂装甲！スターダスト・ドラゴンを破壊！！」
「無駄だ、スターダスト・ドラゴン効果発動……………！」

自身をリリースし、炸裂装甲の効果が無効にし破壊する。ヴィクトム・サンクチュアリ……………！！」

唯の場の炸裂装甲からスターダスト目掛けて空気の刃が飛んだ刹那、スターダストは粒子のようなものへ変わり、刃を受け止めて消した。「（コスモスビートが残ったが……………まだ何とかなるか……………）カードを1枚セットし、EP時にスターダスト・ドラゴンを自身の効果で墓地から特殊召喚。ターンエンドだ……………」

唯side

LP / 4000

手札 / 2

モンスター… 1

ナチュル・コスモスビート

魔法罫… 0

兵吾side

LP / 3200

手札 / 1

モンスター… 1

スターダスト・ドラゴン

魔法罫… 1

セット1枚

「（うー、見た事無いカードばかり。正直卑怯だよ……………）唯のタ
ーン、ドロー……………」

半ばふてくされているかのようにドローする唯。気のせいか彼女の
目が涙目のように見える兵吾だったりする。が、彼女がドローした
カードを見た瞬間、一気に蔓延の笑みが彼女の顔から浮かんだ。

「…………… やつと来たゝ兵吾君、これからこのデュエルは唯が独占す
るよ！」

「何……………？」

「唯はナチュル・クリフを召喚！攻撃表示だよー！！」

他のナチュル同様、アニメ画風なモンスター…………… 石版のようなも
のが現れる。

「手札からおろかな埋葬発動！ナチュル・レディバグを墓地へ！
そして、 4 ナチュル・クリフに 2 ナチュル・コスモスビートを
チューニング！

加護受けし母なる神龍、その吐息は薰風となりて大地を癒やす！
シンクロ召喚！癒やして、ナチュル・パルキオン！！」

唯の場にスターダスト・ドラゴンとは違うタイプの龍が現れる。

「まだだよ！ナチュル・パルキオンがシンクロ召喚された事により
墓地からナチュル・レディバグを特殊召喚し効果発動！

自身をリリースしてパルキオンの攻撃力をアップ！」

ナチュル・パルキオン

ATK2500 ↓ 3500

「バトル！ナチュル・パルキオンでスターダスト・ドラゴンを攻撃

！マザーガイア・ブレス！！」
ナチュル・パルキオンが吹きかけるように息を出しスターダスト・ドラゴンを貫く。

兵吾

LP 3200 ↓ 2200

「カードを1枚セットして唯はターン終了！レディバグの効果は発動ターンのみだからパルキオンの攻撃力は元に戻るよ！」

ナチュル・パルキオン

ATK 3500 ↓ 2500

唯 side

LP / 4000

手札 / 0

モンスター… 1

ナチュル・パルキオン

魔法罫… 1

セット1枚

兵吾 side

LP / 2200

手札 / 1

モンスター… 0

魔法罫… 1

セツト1枚

「俺のターン……………」

貪欲な壺発動。ダガーアサシン、サイスヴァルキリー、ランチャー
トルーパー、ソードウォリアー、スターダストをデッキに戻し2枚
ドロ……………。相手フィールド上のみモンスターがいる事により
メイスビショップを特殊召喚、更にダガーアサシンを通常召喚……
…！そして 5メイスビショップに 3ダガーアサシンをチューニ
ング……………！

天空を駆ける白き流星、その軌跡は風となりて大いなる大地へ降り
注ぐ！

シンクロ召喚！舞え、スターダスト・ドラゴン……………！！」

兵吾の場に再び現れるスターダスト・ドラゴン。

その姿は舞いを踊るかのようである。

「バトル、スターダスト・ドラゴンでナチュル・パルキオンを攻撃
……………シューティング・ソニック！」

躊躇いもなく兵吾が宣言するのと同時にスターダスト・ドラゴンが
攻撃。迎え撃つようにナチュル・パルキオンも先程と同様のプレス
で迎撃し爆発が発生。煙が晴れた時には2体共消えてしまっていた。
「これで、障害は消えた……………！罨発動、リビングデッドの呼び声、
破壊されたスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する……………！」

3度目の登場であるスターダスト・ドラゴン。清音はこの状況に驚
愕の表情を浮かべる。

「……………なるほどね。実技1位と言うのも分かる気がするわ……………」

「BPは続いている。スターダスト・ドラゴンでダイレクトアタッ
ク……………シューティング・ソニック！」

唯

LP 4000 ↓ 1500

「俺はこれでターンエンドだ……………」

唯 side

LP / 1500

手札 / 0

モンスター… 0

魔法罫… 1

セット 1枚

兵吾 side

LP / 2200

手札 / 1

モンスター… 1

スターダスト・ドラゴン

魔法罫… 1

リビングデッドの呼び声

(使用済)

「唯のターン！罫発動ウィキッド・リボーン！ライフを800支払ってパルキオンを復活…！」

唯

LP 1500 ↓ 700

「融合呪印生物―地を攻撃表示で召喚！そして効果発動！このカードとパルキオンを墓地へ送り……………来て、ナチュル・エクストリオ！！」

唯の場にいる2体のモンスターが渦のように混ざり、変わりにナチュル・パルキオンが鎧のように付いた虎のようなモンスターが出る。
「行くよ！ナチュル・エクストリオでスターダスト・ドラゴンを攻撃！ハイパー・スタンプ！！」

ナチュル・エクストリオが跳躍後、スターダスト・ドラゴン目掛けて前足をつつませ破壊する。また、スターダスト・ドラゴンが破壊されたと同時に兵吾のリビングデッドの呼び声が碎け散る。

兵吾

LP 2200 ↓ 1900

「これで唯はターン終了だよ」

唯 side

LP / 700

手札 / 0

モンスター… 1

ナチュル・エクストリオ

魔法罫… 1

ウィキッド・リボーン

（使用済）

兵吾 side

LP / 1900

手札 / 1

モンスター、魔法罫... 0

「俺のターン……………」

あなた、葉月と言ったな……………」

「そうだけど……………どうしたの？」

「1つ言っておく事がある。このデュエル、俺の勝ちだ……………。俺は戦武兵ライフルガンナーを召喚……………！」

現れたのは先程のランチャートルーパーと似た風貌の男性で、手には狙撃銃を持っている。

「戦武兵　ライフルガンナー」

効果

4 / 地 / 戦士

ATK / 500

DEF / 1000

このカードの召喚に成功した時、このターンのエンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は500ポイントアップし相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。

「ライフルガンナー効果発動、召喚に成功したターン、このカードは攻撃力を500アップし、ダイレクトアタックが出来る……………」

「そんな……………（どうしょ……………もう負け決定だよ……………）」

戦武兵ライフルガンナー

ATK 500 ↓ 1000

「終わりだ……………」

ライフルガンナーでダイレクトアタック…………… コインスナイプ!!」

「キヤアアア!!」

兵吾の宣言により片膝を付いてライフルガンナーが狙撃するかのよう
に銃弾を発射し、容赦無く唯を貫いた。

唯

LP 700 ↓ 0

唯のデュエルディスクからライフが0になった事を知らせるアラームが鳴り、2人の間にあるモンスター等が消滅する。と同時に唯は意識が途切れたかのように地面に座り込み、目に大粒の涙をためながら急に泣き出す。

「うぐつ、ぐすつ…………… 酷いよ…………… 見た事無いモンスターばかりで…………… 唯が勝てる訳無いじゃん……………」

他の生徒が見ているにも関わらず泣きじゃくる唯。と、不意に兵吾が彼女に近付き片膝を付いて左手で彼女の頭を優しく撫でる。

「えっ…………… ひよ、兵吾君!?! / / /」

「…………… 立てるか?」

「う、うん / / /」

完全に泣き止んではないものの、落ち着きはしたのか顔を真っ赤にしてそのまま差し出された彼の左手に右手を乗せ一緒に立ち上がる。

「え…………… えつと…………… その…………… / / /」

「初めから勝機が無いとかマイナスな事を考えたりするな……………」

そんなんじゃ、何もかも上手く行かなくなる……………」

「兵吾君……………」

「……………まあ、原因が俺であるからそんな事言える立場じゃ無いんだがな……………」

……………すまなかった、葉月」

「……………うつん、そんな事無いよ。兵吾君の言ってる事に間違いは無いし、それに……………兵吾君とのデュエル、凄く楽しかったから／＼」

「……………あ、ああ」

何時の間にか泣くのを止め、とびきりの笑顔を兵吾に向けて放つ唯。そんな唯の笑顔を見た兵吾は、心の何処かに何か貫かれたかのような感覚が走ったのを感じた。

「……………で、貴方達は何時までそんな事している気なの？」

と、不意に清音が呆れたような表情で仁王立ちしながら2人に言い放つ。

「どうしたの清音？ そんな不機嫌そうな顔して……………」

「何でも無いわよ。……………それよりも、次のデュエルはどうするの？」

「あ、そつか。そう言えばさっき決めたのは最初の唯と兵吾君の組み合わせだけだったよね。兵吾君は次どうする？」

「特に希望は無い。自由に決めてくれ……………」

「なら、次は私と貴男とで良いかしら？」

「ああ、構わない……………」

兵吾の言葉を合図に互いに距離を取る2人、なのだが。

「あんたは何をしているんだ……………」

何故か兵吾の右腕に両腕を絡ませて甘えるようにくつつく唯。

「別に気にしなくても大丈夫♪」

「じゃないからこう言ってるんだろ……………早く離れる葉月……………」
呆れながら唯に言う兵吾。だが唯は離れる事無く兵吾の腕に絡みついて離れようとし無い。

「全く……もう良いわ。やりにくいとは思っけどこのまま始めましょう工藤君。……デュエル！」

「葉月、邪魔だけはするなよ……」

「うん、分かってるよ」

「（絶対分かって無いな、こいつ……）まあ良い、やるぞ。……

…デュエル！」

その後、兵吾と清音の2人は互いに迎え撃つべき相手に向けてデュエルディスクを展開するのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570h/>

遊戯王 ~ academy of days ~

2010年10月21日23時10分発行